

ハイデッガーに於る「形而上学の克服」

吉本浩和

ハイデッガーに於る「形而上学の克服」の特異な意味の解明が課題である。「存在と人間との同一性」と「存在と存在者との差異」との交錯場面としての「性起としての存在」という思想と「形而上学の克服」とは如何なる内的連関を持つか。そして「性起としての存在」が、「形而上学の克服」に於いて、何故、自然や神や人の「自性の発起」としての「方域に於る性起」という形を取る必然性があるのか。我々は〈問〉という言葉キーワードにしてこの問題を考えていきたい。

1 「形而上学」の形式的意味

まずはハイデッガーに於る「形而上学」という言葉の形式的意味の解明が課題となる。ハイデッガーは「形而上学」を「存在忘却」(Seinsvergessenheit)として規定する。なぜ「存在忘却」を「形而上学」と呼ぶことが正当化されるかについての実質的な議論に先立って、まずは次の問題を論じよう。即ち、「存在忘却」とはそもそも何を意味するのか？そして「忘却」される場所の「存在」とは何か？そして「忘却」とは何か？

さて、存在への問いの方法に関して、ハイデッガーの議論を度外視しても一般的に次のようなことが言える。事象のあるがままの「存在」を捉えるには、一定の存在観(例えば存在=科学的に記述できる「在り方」)をあらかじめ立てて、それに照らして、その存在観に適った事象の在り方のみを抽出し、それ以外を二次的なものとして捨象するようなアプローチは取られ得ない。それは論点先取であるからである。むしろ特定の存在観を先行的に立てることを一旦はエポケーし、事象を本来のそのあるがままの〈具体的脈絡〉に差し戻して〈記述〉することが肝要である。例えば動物行動学が示すように、動物の「存在」を捉えるためには、動物を実験室に連込んで解剖してしまうのではなく、そのあるがままの環境の中で〈記述〉すべきである。

後期ハイデッガーは人間の〈具体的脈絡〉に於る在り方を「住む」Wohnen ということから〈記述〉する。「住む」ということは「人間たちが、大地の上で、天空の下で、生誕から死への遍歴を成就する仕方」であり、それは「大地と天空の間、生誕と死の間、喜びと苦痛の間、仕事と言葉との間に於る逗留である」(HH 17)。かかる〈間〉Zwischen にあるということが、人間が人間であるという具体的な〈在り方〉である。さて、この〈間〉は「大地と天空の間」として空間的な〈間〉であり、「生誕と死との間」として時間的な〈間〉であり、「喜びと苦痛の間、仕事と言葉の間」として種々の質的意味を持つ〈間〉である。『芸術作品の起源』で古代ギリシアの神殿を例にとって言われているように、その〈間〉は、「自らを藏し隠す大地」としての自然と、それを一定の歴史的刻印を持った仕方で暴きたてる人間を通じて「開ける」「世界」との「戦い」の場でもある。そしてこの場は、それ自身が「開き」entbergen と「匿い」verbergen との動的な〈間〉という様相に於て生きられる。以上のように、人間にとって生きられる歴史空間は、まさにこの幾重にも重なった〈間〉という性格を持つ。かくしてハイデッガーは言う。「我々はこの曩の多い間 vielfältiges Zwischen を世界と名付ける」(HH 17)と。「住む」という〈具体的脈絡〉に於て人間は〈間〉的にあり、人間にとって住まれた世界も〈間〉的にある。さて、ハイデッガーは、大地、天空、神的なもの、死すべき人の四者が相互に「映じあい—戯れあう」Spiegel-Spiel ような〈間〉的世界を「方域」Geviert と名付ける。とすればまさに Spiegel-Spiel という形で〈間〉の間性が顕在化する「方域」は、「曩の多い間」としての世界の典型ではないだろうか。

さて、かかる〈間〉に於て「住まう」こととして人間は「存在」する。これは確かな事実である。しかしハイデッガーの「方域」思想は、単にかかるありきたりの事実の追認には尽きない。むしろ「存在とは何か」という問いのレベルで、〈間〉の第一次性が主張されている。「曩の多い間」というオンティッシュな記述は、次のような三点でオントローギッシュなレベルでの把握と交錯する。(1)、存在と人間とが「交互に属している」(ID 24)〈間〉の存在論的な第一次性。これは、存在と人間との「相依相属性」Zusammengehörigkeit という意味での「同一性」、両者の「連係」Bezug、「呼応」Entsprechen という言葉とも連関する。(2)、存在と存在者との「互いに保たれ、互いから互いに向けて担われる間」(ID 56.f.)の存在論的な第一次性。これは「存在論的差異」、「担い分け」Austrag、世界と物との「間一分け」Unterschied とも

言い換えられる。(3)、しかも彼によればかかる「同一性」と「差異」との交錯の場自体(『同一性と差異』の「と」という〈間〉)が、「開きつつ匿う」という〈間〉的な様相にある(Entbergung und Verbergung でハイデッガーがイタリックで強調する *und*。VA 270)。「開き」と「匿い」との力動的な〈間〉という在り方は、「恒常的現前性」をメルクマールとする確実性としての真理の在り方に対して、「隠れなさ」(Unverborgenheit, アレティア)としての「真性」Wahrheit と呼ばれる。「真性は、明け開け Lichtung と匿いとの間の闘争」として現成する(HW 50)。

以上をまとめる。〈存在と人間の間〉と〈存在と存在者の間〉との〈間〉は、〈開きと匿いの間〉という在り方に於て生起する。これは単にオンティッシュな事実のレベルではなく、オントローギッシュなレベルで主張されている。さて、かかる〈間〉こそが、ハイデッガーのいう「性起 Ereignis としての存在」を意味しているのではないか。「性起について」という副題を持つ『哲学への寄与』に於て、「間」という言葉が頻出するのは偶然ではない。人間(Da-sein)は「『性起』に瞬間と場所を提供する『間』」(BP 285)であり、そういう「間」は「存在者がその内へとそそりたつ開かれた領野として、存在自身から展開される」(299)。「間は、存在者の存在者性を存在へと基礎付ける。」(13)「間は存在と存在者とをその同時性に於て変化させる。」(15)「間」は「大地と世界への明け開きつつある 匿いつつある 開かれた間」(322)であり「人間と神々との間の対抗振動、いやまさにこの間自身」(263)である等々。

結局、かかる重層的な〈間〉という在り方が後期ハイデッガーに於ける「存在」(「性起としての存在」)ではないか。そしてこのオントローギッシュなレベルでの主張と、オンティッシュな記述としての「方域」とは深い関係がありそうである。では「形而上学」=「存在忘却」という場合の「存在」とは「性起としての存在」のことであろうか? 一体「形而上学」と「性起としての存在」とは如何なる内的連関を持っているのだろうか。そして、これらと、「方域」の中での自然や神や人間の「自性の発起」という意味での「方域に於る性起」は如何関係してくるのか。そういった問題に答えるために、今度は存在の「忘却」とは何かを形式的に見ていこう。

今日、かかる〈間〉がリアリティーを喪失したということこそが如何ともしがたい歴史的な現実である。「方域」という概念がほとんどお伽話の如くリアリティーを持たないということこそが現実である。ハイデッガーも指摘しているように今日では、存在者の陰影に富んだ質的な遠さや近さ(自然の無尽蔵さとしての遠さ、神の神聖な

遠さ、物の親しい近さ)がリアリティーを喪失し「総てが遠くも近くもある」という「休みない距離のとりわけ」(VA 164)が覇権を握る。一様に科学技術的に計算統御される物という水平化された在り方が逆にリアリティーを持つ。科学技術の支配する現在に於て、遠さと近さとの力動的な〈間〉がリアリティーを持たないのはむしろ当然である(近さと遠さの〈間〉は後に「方域に於る性起」との関連で触れられるだろう)。かくして今日では、「存在者の存在とは何か?」というレベルでの問いの答えとして、「爰の多い間」は妥当しない。つまり単にオンティッシュな事実としてではなく、オントローギッシュな理解のレベルで〈間〉のリアリティーが排除されている。むしろ〈間〉は、何か主観的なもの二次的なものとして妥当する。だからこそ「方域」は現在においてお伽話の如く響くのである。

さて、ハイデッガーにとって「存在」とは〈間〉という在り方であるとすれば、まさに以上のような〈間〉のリアリティーの喪失は「存在の忘却」にはかならない。ここで問われるべきことは、かかる〈間〉にリアリティーを認めない存在理解自身が唯一絶対のものかということである。かくして「存在者の存在とは何か?」という問い自体をも規定するレベルでの「存在そのもの」への問いへの「遡行」Schritt zurückが必要になる。しかも科学技術的リアリティーが現在に於る〈存在への人間の係わり〉の仕方)や〈存在と存在者との布置〉や〈真理の在り方(確実性)〉を決定しているとすれば、そのリアリティーが現在の世界に於て覇権を握っているという出来事の生起自身が、存在と人間との〈間〉、存在と存在者との〈間〉、開けと匿いの〈間〉での歴史的な出来事ではないだろうか。つまり〈間〉の忘却自身が〈間〉に於る歴史的な出来事であるとはいえないか。ハイデッガーによれば、以下に示すように、かかる〈間〉での、現在の科学技術を結果するような存在の決定こそが、西洋史の根本動向を決する宿命的な出来事である。そして彼は、その「存在の歴史」のレベルに於る〈間〉のリアリティーの喪失を「形而上学」と名付けているのではないか? しかしながら、やはり何故その出来事を「形而上学」という名で呼ぶことが正当化されるのかと問うことができる。そもそも「形而上学」とは、常識的に言えばプラトンに始まる単に抽象的な学理のレベルの言葉であり、それが西洋の歴史の動向とどう連関するのか?この問題を解明することで、以上での形式的な議論が具体化される。

2 「形而上学」の形式的意味の具体化

さて、ハイデッガーは、ヒューマニズム、ニヒリズム、科学技術、唯物論、現代農業、大地の荒廃、マルクス主義、原爆等々に「形而上学」の烙印を押す。あまつさえ「形而上学の克服」を標榜するニーチエ自身に対しても「ニーチエの形而上学は西洋形而上学の完成である」(NII 97)という。この一見とんでもない考え方は何如にして正当化されるのか。〈間〉の忘却からこの問題を考えよう。

まずは哲学的な学理としての「形而上学」とは何かと言うレベルで見てみよう。「形而上学」とはプラトンに始まるのだから、プラトン以前の存在の捉え方からプラトン哲学の存在の捉え方への転変という形で「形而上学」の何たるかを捉えることができる。ハイデッガーは、アナクシマンドロスやパルメニデスやヘラクレイトスの断片から、「形而上学」以前の存在の把握を次のようなものとして解釈する。第一に、〈我々に係わる存在が有ること(エイナイ)〉と、〈存在への我々の係わりが有ること(ノエイン、レゲイン)〉とは、不可分に一体化していると同時に対立もしているという二重性が第一次的である。つまり、存在と人間との〈間〉としての「相依相属性」とか、その意味での「同一性」が第一次的である(ID 18-19 その他参照)。第二に、〈存在者の有ること〉と〈存在するところの有るもの〉という二つの在り方が不可分に一体化していると同時に区別されてもいるという二重性が第一次的である(WD 136, 148等)。「形而上学」成立以前には、存在と存在者とのかかる〈間〉(「二重の襞」Zwiefaltとか、その意味での「差異」とか呼ばれる)が第一次的リアリティーを持つ。第三に以上の「同一性」と「差異」という〈間〉の様相自体が、匿いと開けの「原抗争」Urstreitという性格を持っていた。つまり「アレティア」(隠れなさ)という〈間〉的在り方が第一次的であった。以上、三点をまとめる。「形而上学」以前の断片から読み取れる「存在」とは、〈開きと匿いと力の動性に於る同一性と差異との交錯〉という〈間〉である。

さて、『プラトンの真理論』等で主題的に論じられているが、ハイデッガーによればプラトンに於る「形而上学」の誕生に於てかかる〈間〉の第一次性の忘却が方向付けられる。(1)、存在と人間の〈間〉は、〈普遍的で確実なアイデア〉と〈それを正しく見る〉という外的適合関係 richten と見做され、両者の〈間〉の力動的な場面は捨

象される。(2)、存在と存在者との〈間〉は、〈可能にする根拠(アイデア)〉と〈可能にされた現象〉という一種の因果関係のフレームワークにはめこまれ、存在は「最高の根拠原因」としての「アガトン」というアイデアであるとみなされる。存在を最高の根拠原因とみることば「存在」を最高の「存在者」と見ることであって、つまりその意味で「存在」を「存在者」と見ることである。(3)、「アレテイア」としての力動的な「真性」は、「アイデアのくびき」の下につながられて平板な「確実性」となり、その〈間〉的性格を失う。

以上のような〈間〉の「忘却」に於て、存在は〈最も普遍的な存在者〉にして〈最高の存在者(つまり神)〉として妥当するようになる。かくして「形而上学」は、アリストテレス「形而上学」に於るような「存在—神—論」Onto-Theo-Logie という構造を持つにいたる。以上でソクラテス以前期に痕跡を残す〈間〉の忘却としてプラトーン—アリストテレスの「形而上学」の誕生が捉え返された。そのような「一般形而上学」としての〈間〉の忘却の路線上に「テオロギー」「コスモロギー」「プシュヒョロギー」という「特殊形而上学」が生じ、ニーチェにいたる〈学理としての形而上学〉の歴史が形成される。神や自然や人間の「自性の発起」としての「方域に於る性起」という思想の意義をよりよく理解するためにこれを簡単に見ていこう。

(1)、テオロギーについて。ヘラクレイトスの断片にあるような神と人間との「戦い」(ポレモス)としての〈間〉(EM 66 など参照)は、神を「最高原因」たる「存在者」とみなすことによって忘却される。かかる「形而上学者の神」は、聖性を喪失した単なる「最高原因」「自己原因」として、世界理解のシステムの中に位置付けられる存在者に成り下がる。「形而上学者の神」となった時点で、〈聖なる存在者としての神は既に死んでいる。「形而上学」的神観としての「テオロギー」の成立は、人間と神との〈間〉という〈在り方〉自体にリアリティーを認めない存在観の成立と表裏一体である。そもそも「恒常的に現前」するという〈在り方〉しか存在者の〈在り方〉を認めない存在定立に於ては、恒常的に現前しないものとしての神という〈在り方〉が意味を持たないのは当然である。かくして「形而上学」に於て、単に「聖なる」神という存在者が死んだというのではなく、神に固有な「自性」にリアリティーを認めるレベルでの存在観自体が意味を喪失する。

(2)、コスモロギーについて。ヘラクレイトスのような「隠れることを好みつつ」自ら立ち現われる「ピュシス」としての自然の〈間〉性は、〈計算統御できる因

果系列)としての「コスモス」として自然を捉えることによって忘却される。かくして「形而上学」としての「コスモロジー」は、自然の〈間〉性の忘却から捉え返すことができる。人間を凌駕する自然の威力は、『寄与』の言葉を使えば、Entmachtungされ、自然は人間に徴用される単なるエネルギー源、「比類ない巨大なガソリンスタンド」(GL 18)に成り下がる。かくて「間」としての自然の固有な「自性」のリアリティーが意味を喪失した。

(3)、プシュヒョロギーについて。アナクシマンドロスやパルメニデスの断片に見られるような、存在と人間的思惟との〈間〉の第一次性は、プラトンに於て忘却され始められる。アイデアを眼前におき正しく見る(vorstellen)という路線上で、自分の見たものを正しくまとめあげ反省し再度自分の前に立てる(apperception, Re-presentationという語のハイデッガーの解釈)という動向が進展する。こういうratioの観点から、人間の本質は捉えられる。他方コスモスの中の一存在者として人間はanimalである。かくして、〈間〉の忘却からanimal rationaleという「形而上学」的人間観が生じる。特殊「形而上学」としてのプシュヒョロギーは、かかる人間理解を基盤としている。さて、ここでratioとしての人間に、死ということではなく、animalとしての人間にも動物的な「落命」Ablebenはあっても人間的な意味で「死を能くする」ことはできない。その意味で「形而上学」的人間観に於て人間は「死すべきもの」ではなくなった(生命工学的な意味で死はあっても)。かくて形而上学に於て人間の最も固有な「自性」(「死」という形で端的に現われる「有限性」)がリアリティーを喪失した。

このように〈間〉の忘却としての一般「形而上学」の軌道の上に、テオロギー、コスモロジー、プシュヒョロギーという特殊「形而上学」を位置付けることができる。かくして学理としての形而上学(一般形而上学、特殊形而上学)の根底として、〈間〉の忘却が捉えられた。さて、特殊「形而上学」の帰結として、人間、自然としての世界、神の「自性」の喪失が示された。この三つの分節に対応するように、ハイデッガーは『野の道』の途上で次のように問う。「魂は語るのか? 世界は語るのか? 神は語るのか?」(DF 40)。この問いが「方域」概念に如何に結実するかをより明確にするために次のレベルに移ろう。

＊

さて学理としての「形而上学」は、形而上学者の恣意的な案出物にすぎないのだ

ろうか。むしろ反対に、形而上学者の生きる歴史的空間自体のリアリティーに於る〈間〉の喪失を形而上学者が表現しているのではないであろうか。プラトンがイデア論を唱えたから、形而上学の歴史が決まったというよりは、プラトンの生きる時代に於ての存在との係わりが「確実性」を確保するという在り方になっていたから、プラトン哲学が当時一般に（そして今日でもそれなりに）受け入れられるのではないか。かくして学理としての形而上学のレベルではなく、〈形而上学者がその中に生きる歴史的空間自体の出来事〉のレベルで「形而上学」を捉え返そう。

ハイデッガーは西洋史の根本動向を「ニヒリズム」として捉え、その延長線上に現在の「技術」社会を置いている。そして彼はこれらを「形而上学」という観点から捉え返す。それがどうして正当化されるかを〈間〉の忘却という観点から見ていこう。

まず「ニヒリズム」について。『ニーチェ講義』等で行われているようにハイデッガーによれば、本来、「ニヒル」という言葉は「存在」に対する「無」を意味する。つまり「ニヒル」とは存在論的概念であって、通常の意味での「ニヒリズム」に言うような「価値」に関する概念ではない。従って「ニヒリズム」とは本来、存在が無的なものとなっていることであり、単にすべてが無価値であるという「価値」に関する立場へと狭められてはならない。彼によれば「存在が無となっている」ということは、存在が存在ではないものつまり「存在者」として捉えられていることである。存在を存在者と考えることは、(1)、存在と存在者との「差異」という〈間〉の忘却であり、(2)、存在を人間にとって一方的に意のままになるものとする点で、存在と人間との「相依相属的」な〈間〉の忘却であり、(3)、存在を「確実に」算定統御できるものとする点で、匿いと開けとの〈間〉の力動性（アレテイア）の忘却である。〈間〉の忘却のこのような動向の帰結として、ニーチェに見られるように、存在を人間にとっての自由に算定統御できる「価値」という観点から捉える「価値思想」が生じる。しかもニーチェが言うように「価値」を人間の生の「維持高揚」の観点から捉えることは、価値あるものがそれ自体として価値があるのではなく、人間のフィクションにすぎないことになる。つまり価値はそれ自身としては無価値であるという帰結を持つ。故に〈間〉の忘却としてのニヒリズムの動向の帰結が、〈価値の喪失としてのニヒリズム〉なのである。

以上のように、〈間〉の忘却としてのニヒリズムの帰結として、常識的意味での〈価値の喪失としてのニヒリズム〉は捉え返すことができる。かくして西洋史の動向

としての「ニヒリズム」は、「存在忘却」としての〈間〉の忘却なのである。そしてこの〈間〉の忘却を「形而上学」と呼ぶことが許されるなら、「形而上学」は「ニヒリズム」である。ではそのような「ニヒリズム」＝「形而上学」と現代社会の根本動向を刻印づけている「技術」とは如何に関連するのか。

まず確認しておかなければならないのは、ハイデッガーが如何なるレベルで「技術」を問題にしているかである。『技術への問い』等で詳しく論じられているように、彼は「技術」という言葉を、現在に於る存在者との出会い方の根本動向を表現しているものとして問題にしている。つまり「技術」は存在者との出会い方つまりハイデッガーの言葉では「開け」の在り方のレベルで問題にされているのである。だからこそ次のような言葉は理解できるのである。「今、存在するものの何たるかは、現代技術の本質の支配によって型刻されて」おり「テクノロジーという表現は原子力時代の形而上学に対する表示として役立つことができる。」(ID 42)

では「技術の本質」とは何なのか。そしてそれは如何なる意味で「形而上学」＝「存在忘却」＝「ニヒリズム」なのか？さて、ハイデッガーによれば「技術の本質」は、総てを機能の観点から捉え、組織化し、操作するという〈存在との係わり方〉に存する。それは、用立て *bestellen*、作り立て *herstellen*、眼前に立てる *vorstellen* といった「立てる」*stellen* ことの連鎖の総体である。その総体をハイデッガーは「組み一立て」*Ge-stell* と呼ぶ (*Ge-* は総体を表す接頭語)。「技術の本質」としての「組み一立て」に於て、存在者はそれ自身の存在の重みを喪失し、〈用立て *bestellen* の連鎖〉の中で「用立てられるもの」(用象, *Bestand*) にすぎなくなる。

ここに於て〈間〉の忘却としての「存在忘却」が極まっていることは見て取りやすい。確実に統御できる「用象」としての出会い方に於ては、存在と存在者との、存在と人間との、匿いと開けとの力動的な〈間〉はリアリティーを喪失する。「用象」という在り方の現在に於る専制的で自明な妥当性は、まさにその現在に於て〈間〉が徹底的に忘却され、その忘却自身さえもが忘却されているということの裏返しである。故に「技術」は「存在忘却」＝「形而上学」＝「ニヒリズム」なのである。そのレベルでの「ニヒリズム」の結果として(順序はその逆ではない!)、神はもはや「用立て」られないものとして死を宣告され、自然は単に「用立て」られるものとして資源になり下がり、人間さえ交換可能な単なる労働力になる。かくして〈価値の喪失としてのニヒリズム〉が技術のエポックに於て蔓延する。特殊「形而上学」との関連で指摘さ

れた、神や自然や人間の固有な自性の喪失は、「技術」に於て、「物」Ding が単に「用象」となること、つまり物の自性の喪失と表裏一体をなして極まってくる。

かかる事態は確かに存在への人間の関わり方に於る出来事である。しかしハイデggerによればそれは人間の恣意的決定には還元できない。確かに本質的に「技術」的に刻印付けられた科学的存在理解 (BP 144 f. 等参照) がリアリティーを持つのは人間が勝手に取り決めたことではない。むしろそれ自身が存在と人間との〈間〉での「歴運」的な決定である。かく決定された「形而上学」的歴史空間に於て初めて、「マルクス主義」(WM 170)「唯物論」(WM 171)「原爆」(VA 164)「大地の荒廃」(VA 99) 等々が生じることが存在論レベルで可能になる。結局「形而上学」は、現在を特徴づける諸事象の歴史的にして存在論的な (あわせて言えば「存在史的な」) 可能性の条件を表示しているといえよう。

以上、まず〈間〉の忘却としての「存在忘却」から、学理としての「形而上学」が捉え返された。故にそういう常識的意味での「形而上学」という言葉を、「存在忘却」の同義語として用いる権利が生じる。次に、〈間〉の忘却としての「存在忘却」から西洋史の根本動向としてのニヒリズムや技術が捉え返された。かくして「形而上学」という言葉を西洋史の根本動向の表示として用いることが正当化される。同時に、学理としての形而上学や西洋史の根本動向としての形而上学との内的連関を解明することによって、逆に、1に於て〈間〉の忘却として形式的に特徴付けられた「形而上学」の意味が具体化された。

3 「形而上学の克服」の意味

最後の問題は、以上のように特徴づけられた「形而上学」の「克服」が具体的には如何に企投されるかである。我々は2で具体的に解明された「形而上学」の帰結から、それを次のように輪郭付けることができよう。

さて「形而上学」は特殊「形而上学」としては、神、自然、人間の固有な「自性」das Eigene のリアリティーの喪失、つまり、聖なる神の死、自然の資源化、人間的死の喪失を結果する。かかる「自性」の喪失は、すべての存在者に対して計算統御される「用象」としてのみ係わるという係わり方の支配と相即して、現在の技術のエポックに於て極まる。かかる歴史空間に於る、神、自然、人間の「自性」の喪失は、物の

固有な「自性」の喪失と表裏一体である。現在の歴史空間が骨の髄までかかる動向を持ったものであるなら、「形而上学の克服」は、まさにこの歴史空間から別の新たな歴史空間（「別の源初」*der andere Anfang*）への「転回」*Kehre* という形を取らなければならないことになる。ではその別の歴史空間は具体的には如何なるものとして企投されるか。2での議論から次のことが言えよう。即ち「形而上学の克服」の向かう先は、神、自然、人間、物の固有な「自性」にリアリティーが回復されるような世界であると。先述の如くそれらの「自性」のリアリティーの喪失はひとえに〈間〉の喪失であったから、結局、問題は〈間〉の回復ということにかかってくる。「形而上学」とはそもそも〈間〉の喪失であったから、その克服が〈間〉の回復という形を取ることはいわば当たり前のことでもある。

さて、かかる〈間〉がリアリティーを持つ歴史空間に於て、神は他に還元できない「自性」を持ったものとして、人間や自然を超越する「遠さ」に於て「近付か」れる可能性が開ける。また自然は、無尽蔵な匿いとしての「大地」と晴れやかな開けとしての「天空」との〈間〉としてのリアリティーを回復する。更にまた、自然の中で生まれ育まれ、死すべきものとして神を待ち望むという人間の〈在り方〉つまり「誕生と死との間」がリアリティーをもつ。かくて、「形而上学の克服」は、大地の上に、天空の下に、神的なものを待ちつつ、死すべき人間が、物の自性を「大切に」(*Schoenen*)しつつ「住まう」*Wohnen* 世界として企投される。これこそが「方域」である。「方域」に於て「物は物として現われつつ、大地、天空、神的なもの、死すべき者に宿る。宿りつつ、物は四者を互いにそれらの遠さに於て近くへともたらす」(VA 176)。かくして1で述べた「襲の多い間」という〈在り方〉は、「方域」的世界に於て、第一次的な存在様式としてのリアリティーを持つことが可能になる。さて「性起としての存在」とは、〈存在と人間との間〉と〈存在と存在者との間〉の〈開きと匿いとの間〉という〈在り方〉であった。とすればまさにこの形式的意味での「性起」は、「方域」に於る物、人、自然、神の〈間〉に於る各々の「自性の発起」*Er-eignis* という意味での「性起」*Ereignis* として具体的に「住まわ」れる。よって「性起としての存在」は、「方域」に於る「自性の発起」の意での「性起」として具体化される。これが〈間〉の喪失の克服としての「形而上学の克服」の具体的企投の姿である。以上、「形而上学の克服」と「性起としての存在」と「方域に於る性起」との連関が明らかとなった。確かに、〈間〉の忘却の支配する技術の世界たる現代に於て、まさに

〈間〉の世界たる「方域」がお伽話でしかないのは論理的に必然である。だがハイデッガーの問題は、まさに「方域」をお伽話たらしめる現在自身を転換するレベルにある。そのレベルでの「転回」こそが「形而上学の克服」である。この「転回」自身は、意志的に統御される「克服」überwinden という形はもはや取りえない。なぜなら意志的に統御するという在り方はそれ自身「形而上学」的であるから。「形而上学」の非「形而上学」的な仕方での「克服」は、それ自身が存在と存在者と人間との〈間〉に於る開きと匿いととの〈間〉に身を曝し（脱存, Ek-sistenz）「耐えぬく」verwinden という形を取るであろう。

註

ハイデッガーからの引用は次の略語で示す。

- HH Hebel-Der Hausfreund (Neske)
- I D Identität und Differenz (Neske)
- V A Vorträge und Aufsätze (Neske)
- HW Holzwege (Gesamtausgabe Bd. 5)
- B P Beiträge zur Philosophie (Ga. 65)
- N II Nietzsche II (Neske)
- WD Was heißt Denken? (Niemeyer)
- EM Einführung in die Metaphysik (Ga. 40)
- G L Gelassenheit (Neske)
- WM Wegmarken (Klostermann, 1967)
- D F Denkerfahrungen (Klostermann)

〔日本学術振興会特別研究員〕

„Überwindung der Metaphysik“ bei Heidegger

Hirokazu YOSHIMOTO

Die Aufgabe dieser Abhandlung ist die Erklärung der besonderen Bedeutung der „Überwindung der Metaphysik“ bei spät Heidegger. Dadurch wird deutlich der innere Zusammenhang zwischen „Seinsgeschichte“, „Sein als Ereignis“ und „Ereignis im Geviert“.

Ich interpretiere „Metaphysik“ als die Vergessenheit der ontologischen Priorität von „Zwischen“, das in „Identität von Sein und Mensch“ und „Differenz von Sein und Seiendes“ besteht. Diese Vergessenheit macht den Grundzug der abendländischen Geschichte aus. Ihre „Überwindung“ ist meiner Meinung nach Hin- nahme und Aushaltung von diesem „Zwischen“.